
幻や、夢のまた夢、浮世かな

アーベリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻や、夢のまた夢、浮世かな

【Nコード】

N15040

【作者名】

アーベリー

【あらすじ】

途方も無い巨乳が激しく波打つ野生的な肉体、残忍な眼差しと淫らな微笑で化粧した完璧な美貌――こんな主に仕える、世にもうらやましい男ランザーは駆け出しの錬金術師。金が仇の世の中で、涙は娑婆の友なりし、されど悲しき人の性。表の顔は神秘的な占い師、そしてもう一つの顔がはびこる悪を懲らしめる美しき女仕事師デイトナ様の挑発的な艶姿。あんたら、その目にしっかり焼き付けて昇天しな！

踊り子の夜 へ1へ

ホールには、40人前後の客が入っていた。

中央には、円形のステージが据わっていた。

ろうそくと油をともした照明で、可能な限り明るく照らされた円形の舞台では、花束のような衣装に身を包んだ踊り子たちが、底力のこもったドラムの急速なビートと競い合うように、艶やかで刺激的なダンスを披露していた。極楽蝶を思わせる色とりどりの羽や飾りを着けた衣装の間から、惜しげもなくさらされる肌が妖しく煽情的であった。

客達はどの顔を見てもいかがわしい、一癖も二癖も有る様な客ばかりであった。自ら暴力に手を染めるプロの筋者ではないが、一目で堅気ではない事が丸分かりという面々である。世間の裏街道に入り込み、悪どい方法でもうけた金を懐にねじ込んだ成金予備軍といった感じである。背中には、弱い貧乏人の怨念がへばりついているような連中だった。

やがて、ダンスも終わり、踊り子たちはステージに一本通じた通路を、大げさな身振りで客に愛想を振りまきながら退場してゆく。続いて舞台を照らしていた灯が次々と消え、場内は真っ暗になった。否、暗いのはステージであって、ホールのあちこちには依然ランプが燈っている。

しばらくすると、ステージの周囲に配置された照明に再び火が入られる。

幻想的に揺らめく明かりの中に、人影が浮かび上がった。

舞台の中央に蹲る様に身を伏せた、金髪の踊り子だった。

踊り子は白いショールで全身を覆っていた。それも、座り込んだその周囲に目一杯裾が広がるような、かなり大きいと思われるサイズである。上から観ると、何かの模様のように見えるのかもしれないかった。

ステージを囲むように配置されたランプがあらかた点灯されると、踊り子はおもむろに立ち上がった。

顔の上半分は黒いマスクで覆われている。仮面の下からですら、その研ぎ澄まされた美貌が窺い知れる様な顔立である。ショールから覗く肌の色は、どうやら褐色のようだった。

長いショールを身にまとっていた。立ち上がったも、膝下まで隠れるような丈の長さである。そのうえ、普通にショールを巻いているのではなく、一枚の大きな布から真ん中に穴が開いてそこから首を出しているらしい。仄暗い灯火の明かりですら中が透けて見えそうな薄手のシースルーだった。

脚にはストッキングとヒールを履いている。

踊り子は、身を翻して一回転すると、おもむろに舞を始めた。

踊り子の夜 〈2〉

物寂びた管楽器の演奏に合わせて、シヨールを翻しながら、踊り子は舞う。

出だしは踊りながらステージを回る。鳥の羽のようにシヨールを広げて、時折クルリと身を翻しながら、ステージを回る。

ただ水平にシヨールを振るだけでなく、上下に、斜めに、体をしなやかに折り曲げつつ、ステージに舞う。

その踊りの合間合間に見え隠れする、シヨールの下に隠された肢体に観客の目は熱く、卑猥に注がれる。下半身には、どうやら真っ白なスキヤンティを履いているようであった。

やがて、踊り子はステージの中央に立った。そのまま跪くと、けだるい仕草で身を横たえた。舞台の上で横たわったまま、仮面の踊り子は卑猥に身をくねらせる。シヨールのに隠された豊潤な肉体が今どのような姿勢をとっているのかは客席からは見えないが、それだけで観客たちは大いに興奮をそえられるようであった。

音楽の調子が変わってきていた。今までは、流れるように断続的な管楽器の演奏だったのが、打楽器による、途切れ途切れの響きに変わってきていた。

踊り子は座り込んだまま後ろに手をついて上を見上げた。身を反らすようなポーズを取ると、シヨールを押し上げて物凄い乳房の量感が露わに見せ付けられる。その姿勢のまま、打奏音の間を縫うように両脚が交互に振られ、履いているヒールも脱げかけている。そのうち、右足のヒールを勢い良く蹴り脱いだ。続いて、左のヒールも蹴り飛ばした。

観客が、おお、とどよめいた。

相変わらず後ろに手をついたまま、踊り子は天井を見上げていた。そのまま波打つように身をうねらせ、両足をすぼめるように内股の姿勢になる。その、官能的な一挙手一投足に、観客の目は釘付けである。

揺らめく灯火に浮かび上がるその姿は、この世のものならぬ幻想的な情感に満ちているように見えた。

踊り子が右脚のストッキングに手を掛けた。そのまま引つ張ると、ストッキングは伸びてゆく。その間も、観客は息を搾り出すようにどよめいた。踊り子が、右脚のストッキングを脱ぎ捨てた。しばらく、そのストッキングをもてあそび、振り回したりした後、遊び飽きた子供のように放り出した。そうして、左のストッキングも脱いだ後は同様のプロセスを経て、投げ捨てる。

続いて、露わになった美脚を掌で撫で、玩びながらその感触に統帥するような仕草で何度も愛撫を繰り返した。太ももからふくらはぎに掛けてをしなやかな指と掌で撫で回しつつ、肩をすくめたり身もだえしながら息を乱し、辛うじてその甘美な感触を堪えているかのようであった。

多数の目にさらされ、好色な視線の只中で無心な自慰行為に耽るような姿は、淫蕩であると同時に不思議なあどけなさを感じさせる。

やがて、最後の絶頂を迎えたかのようにのけぞりながら大きな溜め息をつく、今一度ステージの中央で立ち上がった。

しばらく俯きながら、踊り子は息を殺すように佇んでいる。その間も少し筒向きを変え、全ての客席から観える様にと緩慢に回り続けていた。何か踏ん切りがつかずに迷っているような仕草だった。

そうして、躊躇いを振り切るような気配を漂わせながら、顔を上に

向ける。

踊り子は、大きく一呼吸置いてから、シヨールの下で肘を曲げるような格好になった。

両手を腰にあてがっているようであった。

踊り子は少しばかり前かがみになると、左膝を上げた。

シヨールの端から何か、白い布と思しき物が覗く。

客席全体が、息を吞むように静まり返った。シヨールの下で如何なる行為が為されているのかを想像して、全員がその挙動に注目しているようである。

その、切羽詰った沈黙の真っ只中で、踊り子はその作業を続ける。

右膝を上げて、踊り子は両腕を動かしていた。

やがて、それが終わり、踊り子は再び静かに立ち尽くしている。

観客は、次に何が起こるのか、一瞬たりとも見逃すまいと言うように食い入るような目線を舞台に取り残されたようなたたずまいの踊り子に注いでいた。

踊り子は、静かに動き出した。

踊り子の夜 〈3〉

仮面の踊り子は、静かに右手を掲げた。

その手には、下半身に履いていた白いショーツが握られている。

左手は、ショールの端を握って下に引っ張っている。

その姿勢のまま、踊り子はクルリと一回転した。

上に掲げていたショーツを目の前に下ろし、両手で掴み閉めながらじっと見つめている。その間も、ゆっくりと向きを変え続けている。全ての客にその姿を見せる事を、常に意識しているのだろう。否、もうそれは無意識の配慮なのかもしれない。常に向きを変えて全ての観客に見せ続ける事は、習慣化した反射的な行動であるかもしれない。

やがて、おもむろにスカンティを放り捨てた。

ショールの裾を握って下に引っ張り、上体を揺らしながら、と言うより腰を振りながら向きを変え、クルクルと回る。観客の欲情を煽るような、それを拒むような、微妙な仕草だった。

一頻り身をうねらせると、踊り子はステージの端まで進んだ。

音楽がまたしても変わっている。今度は軽妙な、笛の音色であった。

飽くまで下半身を隠しながら、踊り子は舞台の端を、クルクルと回りながら歩いてゆく。自分の全てがあらゆる方向から見えるように身を踊らせ、踊り子は進む。

踊り子が目の前に来ると、客は身を乗り出すように目を向ける。そんな観客の期待をはぐらかすように、踊り子は舞台の上を軽やかに舞い続ける。

そうやってほぼステージを一周した後に、踊り子はショールを握っていた手を離れた。そして、同じように舞台の上を歩いてゆく。

ショールの裾が翻るたび、客の卑猥な期待感は上昇してゆく。

ステージを一周した後、今度は両手を小さく動かしながら、踊り子は同じように回り続ける。

踊り子の腕が右に左に、前に後ろに振れる度、ショールの端はフワリとめくれ掛ける。

更に客席のテンションが上がる。

踊り子は巧妙にショールを捌いて中身を見せる事は決してしない。

それでも、何かのハプニングでも起こらぬかとばかりに、客の目は一瞬の隙も見逃すまいと踊り子に注がれている。

踊り子の周囲に漂う緊張は、既にショーに慣れた余裕と、何かのアクシデントが起きぬかという不安とにはさまれながら、舞を続けると言いきわどい気配だった。

時に、ショールが大きくまくれて見えそうになるが、踊り子はその都度両手でショールを引き下ろし、下半身を死守していた。

更に舞台を周り終えると、今度は軽く脚を上げながら踊り子が舞を続ける。流石にショールの端は握りながらの行為であるが、時折その裾を手から放して客の期待感を煽る事も忘れない。時に膝を上げ、小石でも蹴り飛ばすように脚を伸ばしながら、ステージを周る。

そうして、次の一周の際には更に脚を大胆に、殆ど蹴り上げるくらいまで大きく動かしつつ、舞台を歩き続ける。

やがて、踊り子はステージの中央に歩み寄った。

仮面の踊り子は再び舞台の中央に立った。

軽妙な笛の音は鳴り止んでいる。

ステージの上でゆったりと回りながら、ショールの下で両手を上下

させていた。腕だけではなく、踵を一緒に上げて何かのリズムを取るように動く。

その手の動きを止めると、踊り子はショールの裾をつまみ、少しだけ引き上げた。

客席に、塊のような緊迫感が漲る。

引き上げていたショールを話すと、踊り子は再び俯いた。何かの悔いを残しているといった趣であった。

もう一度、踊り子はショールを引き上げた。膝を見せたくらいの、中途半端な高さのまま、いつまでもステージの中央で回り続けている。

客に向かって、許しを乞う様な姿だった。

観客は、残酷な期待に満ちた沈黙を持って、踊り子を追い詰めている。

首をすくめ、怯えたような仕草のまま、踊り子はショールの端をつまんでいた。

踊り子が悲しげに佇んでいるその間にも、威圧的な沈黙は容赦無く過ぎ去ってゆく。

踊り子は救いの無いままに、ステージの上に取り残されたようであった。

ついに踊り子は、未練を断ち切るようにショールを差し上げて首を縮めた。

その姿に、客席の内側に秘めた欲情が更に高まった。

首を通す穴に顔がスッポリ隠れて、下は太ももが露わになった。

おお、と客席がどよめいた。

沈黙とざわめきが混じり合う客席には、息を吞むような期待感と痛いほどの緊張が漲った。

そして――ついに踊り子は、ショールを脱ぎ捨てたのであった。

踊り子の夜 へ4へ

純白のショールがフワリと宙に舞った。
観客の視線は踊り子に釘付けである。

踊り子の下半身には――黒い下着が纏わり着いていた。

非常に小さな、バタフライか何かのようである。

上半身にも、踊り子は黒い衣装を身に就けていた。ノースリーブの、チョッキかベストのような衣装である。胸にも、ビスチェか何かのような肌着が巻かれてある。

その衣装の下に隠されている乳房の、物凄い質量が薄暗い火明かりの揺らめきの中でも見て取れる。

仮面の下から覗くつややかな唇にいたずらっぽい微笑が宿る。してやったりといった、無邪気な勝利の微笑だった。

客席もその趣向を歓迎した。

場内に銅鑼が鳴り響いた。

響き渡る金属の低音に合わせるかのように、ベストに手を掛けるや身をくねらせ、腰を揺らしながら踊り子は扇情的なアクションを見せた。手で持ったベストを脱ぐのか脱がないのか、開いたり閉じたりするように何度も広げて見せた。

踊り子はベストを掴んでいた手を離すと、上に掲げてまたもクルクル舞い始めた。何か、水中を海藻がたゆとうようにしなやかな両腕が絡み合いながら踊っている。

踊り子は、頭上で組み合わせていた両腕を解いて、大きく広げながら下ろしてゆく。その間も無論、腰の動きは止まらない。今度は頭の後ろに両手を組んで、踊り子は悩ましく腰を動かしている。しば

らくその動きを繰り返すと、またしてもベストに手を掛けた。

どうやら、時間を掛けてじっくり焦らしながらこのベストを脱いでゆくりしい――誰もがそう思った頃合を見計らったかのように、踊り子は一気にベストを脱いだ。

客たちの裏を搔くように、巧みに気分をはぐらかす。勿論、その都度、観客は盛り上がるのであった。

踊り子の体を隠すのは、ビスチェと小さなバタフライだけとなった。脱いだベストを左手で振り回しながら、踊り子はまたしてもステージの端を歩き回る。

踊り子の肌に、うっすら汗がにじみ始めている。しかし、息はまったく上がっていない。本番はこれからだと言わんばかりに、益々エクスタシーに向かって駆け上っているかのようであった。

ステージを一周した踊り子は、再び舞台の中央に立った。

次に何が飛び出すのか、観客は安心して一瞬たりとも目が話せないという、怠惰な興奮へと誘われて行く。ダンスの最中もボーイやバニーガールたちがホール内を歩き回り、酒を注いだりしていたが、客の誰もがそんな事を気に留めたりしない。

ベストを無造作に放り捨てた踊り子、その両掌でへその辺りを撫で回す。その手が脇腹の辺りまで移動し、卑猥な快楽に溜め息をつくように上を見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1504o/>

幻や、夢のまた夢、浮世かな

2010年10月17日23時28分発行